

竣工から114年目、ネオバロック様式のトーハク表慶館



外観も見どころ満載だが、内部の凝りに凝った数々の意匠は明治時代の底力を感じさせる

今回取り上げるのは、1908（明治41）年に竣工した、東京国立博物館・表慶館だ。

東京国立博物館・表慶館は大正天皇の皇太子時代に、ご成婚記念の建物として1900（明治33）年に計画されたもの。設計は東宮御所（現・赤坂迎賓館）の設計も担当した建築家の片山東熊が行った。以前にこの欄で紹介した、東京国立博物館の初代本館の設計を担当したジョサイア・コンドルは、片山東熊の師匠に当たる。

表慶館は赤坂迎賓館とも似たフォルムをしており、中央および左右にドーム屋根を配したネオバロック様式が特徴的だ。

また、入口の左右に配されている2頭のライオン像は、神社の狛犬にも似た配置で、実際、狛犬と同様に2頭のライオンの口が「阿吽」の形になっている（ライオン像の作者は明治時代の著名な彫刻家・大熊氏広）。

建築史的には明治時代末期の洋風建築を代表するものとの評価がなされており、1978（昭和53）年には、国の重要文化財にも指定されている。

しかし、その後、老朽化のために雨漏りなどの不具合が生じたため、2005（平成17）年度いっぱいをかけて補修（とくに屋根の修理、展示室内部の壁面の塗り替えなど）を実施。2006年度から再び公開されている。

とくに壁面の塗装は創建当時に近い色を再現、ドーム内部の天井画の塗料の剥落もまったくなくなったほか、床に敷き詰められた大理石はフランス産という本格派。

創建当時の雰囲気がかしこで楽しめる。明治時代の建築らしく重厚かつモダンな意匠に満ちている（未知草）